

それにつけても、なにか、少しでもいいから日本の自主性を持たざるを得ない、いや、別の意見があつて日本は自主性など必要ない、あればまた間違いを起すだけだ、貿易摩擦に代表されるように欧米からタタかれて、はじめて少しずつ、訂正してく方法が一番いいんだと言う。よく聞いてみると、言葉としては日本人に失礼キワマリない実質的にはそのとおりの歴史だし、いまにはじまったことではないし、結構、その態度がルールになっているのだと私もなるほどというしかない。でも、日本、この日本という言葉がよくない。人間として、もう少し自主性、自分のことは自分でやっていいということ、自分のことは自分で責任をもつということがあつていい。私も思えば、君もあなたも思っていることは確かだが、その方法が判らない。そんな方法、方針などの判らない砂漠に乗り出して行くのが前衛の行く道だとすれば、いやが応でも読み切ってしまう独創が要求される。長く具体を、いや長く嶋本先生を研究してくると色々の要素があぶり出されてくる。

1972年、刀根先生のすすめで、パリに移り住むことになるわけだが、その前に岩田、加藤先生達が名古屋で市長選をやるので来いというので、その年の春、名古屋についた。どちらが先か忘れてしまったが、長年尊敬している吉村益信先生が百人組を作るといつていた。この次元では、それとも関係ないか、よく覚えていない。確かロスで、ロスの美術学校を卒業した若い美術家が画廊を開いていた。そこへ私皆島、刀根先生等と行ったところ、先日から具体の嶋本先生のハブニングをやっていました。といい、彼自身大阪の出身の人であったと記憶している。我々がいったところ、日本の人形作家がやっていた。あゝ残念、お逢いしたかった気持があつた。それで1972年、名古屋へ行くついでに、嶋本先生が大阪の画廊で個展をしている会場へ行き、後日の会合を約した。後日、名古屋から嶋本先生とほかに5、6名の仲間と一緒に会食して、私ははじめて親しく嶋本先生と話したのである。

それが機会となつて、吉村益信、吉野辰海、石松先生等が中心になつて作られたアーティストユニオンに嶋本先生ともどもメンバーになつた。それ以来、近い友人としておつきあいすることになつたのである。嶋本先生のやり方で一番感心するのはムリをせず、たのしく、やってゆけるテクニックが抜群にひいでていることである。それから、すでに15年間ぐらいつづいているあいだ柄である。そのAUを、いまや世界的なものとして仕上げた、その人物の大きさにはただただ敬服するばかりだ。私も小さいといえ沢山のグループ運動を手がけてきているが生来のヒステリーで、それぞれの期間は短い。その意味では私の全く逆の性格である故に私はひかれるのかもしれない。こう長くジツと嶋本先生を見つけてきて、具体から飛びたつた偉大な作家たちの作品、行動を見ていると、どちらも偉大に違いないけれど具体という体臭は、やはり嶋本先生から生れていることがよく判る。